

藤原審爾

一人はうまからず



藤原審爾

一人はうまからず



毎日新聞社

ひとり
一人はうまからず 定価一二〇〇円

昭和六十年四月二十日 印刷
昭和六十年五月五日 発行

著者 藤原審爾

編集人 川合多喜夫

発行人 関根 望

発行所 毎日新聞社

〒一〇〇 東京都千代田区一ツ橋

〒五三〇 大阪市北区堂島

〒八〇二 北九州市小倉北区紺屋町

〒四五〇 名古屋市中村区名駅

印刷 精興社 製本 大口製本



著者遺影(昭和56年)

生きて行く私 宇野千代

実りのとき 三浦朱門

珍獣戯話 吉行淳之介

桃花洞葛飾ごよみ 伊藤桂一

地を潤すもの 曾野綾子

あくび指南書 阿川弘之

常にためらわずに行動し、ひたむきに前を向いて歩いた86年の歲月。尾崎士郎、東郷青児、北原武夫らとの華麗な愛の遍歴と文学に情熱を注いだ半生を率直に綴る大河自伝。 上下各九八〇円

子育てが一段落してデザイン工房に勤め始めたお嬢さん育ちの主婦を主人公に、働く妻たちの生き方を追って、社会に出た女性に生じる多様な変化を、明るくユーモラスに描く。 九八〇円

日本の動物園や水族館には意外に知られていない珍しい動物がいる。その生態や体形、エピソードを、名エッセイストの著者が奔放な発想と七色の筆にのせて生き生きと描く。 一三〇〇円

幼い頃から修験者と共に諸国を遍歴し、医術と武芸を修めた夢庵先生。いま江戸近所に風雅・清貧の日々を送る。人情味溢れる人柄にひき寄せられた男女の起す事件とその顛末。 九八〇円

弟はどうして死んだのか。戦犯として処刑された弟の生を見直すため、30年後にその足跡を辿る兄を通して、虚無と無惨の上にひときわ高く聳えた人間の魂の雄々しさを描く。 八五〇円

友の奇行奇言を語って痛快、師を惚べば哀惜、世相を斬って峻烈。旅と果物は自家薬籠中のもの。ユーモアと諷刺を軽妙な文体で、ヴィヴィッドに綴った小気味よいエッセイ。 九八〇円

最寄りの書店、または直接本社に御注文下さい（振替口座 4-56534）

一人はうまからず
目次

I 動物と文化

威というもの 11

動物から学ぶということ 13

鷹と鷹匠 18

庭の小鳥たち 23

わが愛猫記 28

II ものどころ

ものどころ 35

III 旅

雪どけの西の京に 49

奈良へ 49 薬師寺 50

秋篠寺・西大寺 56

唐招提寺・喜光寺 53

IV

味と酒

料理と味 83

料理のこころ 83 自然の摂理 84 ご馳走出来る

こころ 85 一日一菜 87 「いいめし」と「バリ」

88

秋日小話 90

偏食について 93

甘口辛口 95

しもごえ 95 柿そっくりの野菜 96 執餌時間

97 殺生 97 魚の卵 98 ぼく豚です 99

江戸時代の街並み 59

臼杵・国東の石仏 65

六十年余さまざまの旅 71

雪野に虹——石見・匹見 75

牛の墓 99
養殖 100
食するところ 101
還る

102
日本酒のこと 103

V 人と人影

ハモニカ横丁の頃——江口榛一のことなど 109

梅崎春生——その噂 113

不死身の詩人——矢野五一 115

豊かな人——広津和郎先生 122

瀧井孝作さん 125

坪田譲治さんのこと 126

木山捷平さんの詩のこと 130

今村昌平——自由男の自由酒 135

白紙庵主人——石川辰雄 136

中村直人さんの愁い 139

VI

美しいことば

聞くところ

147

超えること

149

無言の世界

151

ところを得る

153

理想への配慮

156

自在な意識

158

集中

160

言語と内なる世界

162

いきいきしたところ

164

一人一言

167

愛と誇り

169

言うべき時

171

VII

美の敵

173

一人はうまからず——青春の軌跡

生家

177

母のこと

182

元服

190

祖母の死

192

心中後樂園

199

戦争の中の青春

205

空襲のなかで

217

文学への道

222

一人はうまからず

裝
幀

堀

文

子

扉
題
字

藤

原

審

爾

I

動物と文化

威というもの

動物には、それぞれ持ちまえの威というものがある。知り合いの鷹匠の家で、あるときハンターの猟犬が、鷹の小屋のほうに近づいていったが、金網の間ほどてまえで、立ちすくみ、それ以上すすめなくなったのを見たことがある。とまり木にとまった熊鷹に、射すくめられたのである。

このほど見た「マタギ」という映画の中に、熊とたたかう猟犬の競技があった。鎖でつないだ熊に、猟犬をけしかけ、猛烈にたたかった猟犬が優勝するわけである。鎖でつながれた熊を中心に丸く白線が描かれている。その白線の中が土俵である。もちろん熊は鎖の長さしか動けない。熊の手や牙がとどかぬところから、猟犬は吠えたてながら、隙をみて咬みついていく。白線のところから、熊の鼻面までは、三メートルあまりある。熊に気おされて、攻撃出来ず、ただ吠えてるだけの猟犬もいれば、攻めこんでいくものもある。そのうち登場した少年の犬は、熊におびえて、白線の中へ入っていくことが出来ない。白線の中へ入っても、熊の手もとにとどかないの

だが、それでも近づくことが出来ない。少年をはじめ連中が、その犬をはげまして白線の中へおしこもうとすると、その犬はむきをかえて逃げようとする。そのうちその犬はころりと横になり、くるりと仰向けになってしまった。これは、無抵抗あるいは降参の意志表示で、猫や犬やライオンなどもこの恰好をする。すかさず審判員が、「格負けー」という判定を大声で告げた。

自然の生きものには、こういう格負けのようなことがおこる威の威力の差がある。蛇に睨まれた蛙が動けなくなってしまうのも、こういう威によるものだろう。

動物たちは、とくに同種族の中では、この威を競うことで、殺し合いを避けたり、群れの中に順位をつけ、それによって無益な乱闘などをしなくしている。

わたしたち人間は、それを師として、威や腕力のかわりに、地位や金で無益ないさかいを避ける秩序をつくってきたのだが、それが新たな苦勞をもちこんだ。威は多分に生得的なものであるが、地位や金は獲得出来るものなので、獲得のための競争やいさかいに人間は苦勞しなければならなくなった。ことほど然様に、人はあまり利口ではないのだが、そのことさえも、よくわからないのである。